

博士論文要旨

「ポスト・モンゴル期イランにおける宗教政治的権威の再構築——メシアを称する者たち——」

角田哲朗

本研究の目的は、ポスト・モンゴル期イランにおけるメシア主義運動の展開を明らかにすることで、当該時代における宗教政治的権威の再構築という問題に光を当てることにある。

序論では、まず、本研究の問題設定と研究目的を示し、次いで、本研究の理論的前提を確認する。その後、先行研究の批判的レビューを行い、本研究の位置付けを明確化した。本研究が前提とする理論的枠組みは、ポスト・モンゴル期のペルシア語圏の君主らは、王権神授理念を発展させ、政治的権威と宗教的権威を君主個人に集約させようと試みたという、所謂「神聖王権」論である。従来の神聖王権研究では、当該時代の君主らは、神による直接任命を含意する聖者性を主張することで、両権威を結合したメシア的な王権を構築したとされる。従来研究には、次の3点の課題がある。第一の課題は、従来研究は、宗教と政治の一体化という問題を強調する余り、王権が利用した多様なイデオロギー群を均質で交換可能な概念として扱い、その差異に関する注意が不足していたこと。第二は、先行研究が依拠する史料群での端的な表象（称号における利用）からでは、当の観念（例えば「マフディー」）が帯びていた同時代的なニュアンスを推し量ることは原理的に困難だということ。第三は、従来研究は「君主の聖者化」という現象に焦点を当てており、「聖者の君主化」という視座からの検討が不足しているという点である。従来研究は「聖者の君主化」の代表例としてサファヴィー教団教主にしてサファヴィー朝初代君主のシャー・イスマーイールの事例を挙げるものの、史料的制約ゆえに、そのメシア主義の内実を検討する手立てがないという未決の問題が残る。そこで、本研究では、イスマーイールと同時代にメシアを称した他の3名の聖者たちに着目し、彼らのメシア自称論と信奉者らによるメシア認定をテキストに基づいて復元することで、従来研究に不足していた「聖者

の君主化」の事例を検討する。

第1章では、具体的な検討に向けた先行研究の知見の整理を行った。第1節では、イスラーム史におけるメシア主義とメシア主義運動の展開を概観し、第2節では、本研究が対象とするポスト・モンゴル期イランにメシア主義が高揚した背景を確認した。当該時代には、① 直観知を重視する神秘主義的潮流 ② 法学者層の権威失墜に伴うスーフィー・シャイフの権威強化 ③ 既存秩序の崩壊によるメシア待望論 ④ 「聖者性」観念を軸としたスーフィーらとシーア派の接近、の4つの潮流が複合することで、聖者がメシアを称して宗教政治的権威を主張する素地が生まれた。第3節では、先行研究に依拠しながら、15世紀後半に活動したムハンマド・ヌールバフシュのメシア自称論を検討した。ヌールバフシュは、ハディースに伝えられるマフディーの特徴と自身のそれとの一致や、占星術上の知見に立脚して自身のメシア性を証明しようとした。しかし、何よりも重要だったのは、彼がクブラヴィー教団の教導を受けたスーフィーだったという点であり、そのため、彼は同教団が重要視する夢とシャイフらの予言に基づくことで、スーフィー的な世界観に基づくマフディー自称論を構築した。

第2章では、同じく15世紀半ばにイラン南部のフーゼスターン地域に地方政権を樹立したサイイド・ムハンマド・ムシャアシャのマフディー自称論を検討した。第1節では、同時代史料に基づき、サイイド・ムハンマドの経歴と彼のメシア主義運動の展開を確認した。第2節から第4節では、彼の自書『マフディーの言葉』の読解に基づき、彼が自身のメシア性を正当化するために展開した論理構造を復元した。第2節では、彼は隠れイマームをマフディーと認める十二イマーム派の立場でありながら、隠れイマームの実際的な顕現が否定される論理を構築していたことを確認した。サイイド・ムハンマドは、「歴代イマームの不死性」という特異な教義を提唱することで、論理学で扱われる「選択に関するパラドクス」を導き出し、隠れイマームのマフディーとしての実際的な顕現を否定した。第3節では、サイイド・ムハンマドが名乗った「マフディー」の称号には、隠れイマームの代理としてのマフディーとしての位置づけがあったこ

と明らかにし、その代理権の構造を検討した。彼は、神が人や物体をヒジャーブとして利用することで、現実世界に現れるというヒジャーブ理論を唱え、隠れイマームの本質も同様にサイイド・ムハンマド自身の肉体をヒジャーブとして利用していたと理論化した。続く第 4 節では、ヒジャーブ理論に基づく代理権が他ならぬサイイド・ムハンマドにあることを正当化する論理を検討した。彼によれば、神の企図するところは、最後の審判に先駆けて信仰者を選別することであり、この試煉のためには、超常的な権能を有さないマフディーが必要だと主張された。この論理に則る限りにおいては、超常的なメシア的権能を持ち合わせた隠れイマームが再臨することはない。したがって、常人らしい「弱さ」を持ち合わせたサイイド・ムハンマドが代理のマフディーとして顕現することが要請される。この非メシア的マフディー即ち「共同体のマフディー」を自認するサイイド・ムハンマドは、自身の宗教的知識がその地位を保証していると論じる。但し、彼が声高に主張する宗教的知識は、共同体のマフディーたる必要条件であって十分条件たり得ない。本研究は、必要条件のみが強調された理由を、王朝権力樹立後におけるメシア的王権の日常化に求めた。

第 3 章から第 5 章まではフルーフィー教団という一連の主題を扱った。第 3 章では、先行研究の知見とテキストに基づきながら、第 4 章以降で本格的に扱うファドルッラー・アスタラーバーディーと同教団に関する基礎的情報を共有した。第 1 節では、フルーフィー教団の研究史を振り返り、第 2 節ではファドルッラーの経歴と彼が創始したフルーフィー教団の史的展開を整理した。ファドルッラー・アスタラーバーディーは夢解釈師としてそのキャリアを開始し、一連の啓示的な夢を通じて、イスラームの真理を悟ったと主張する。彼はティムール朝により処刑されるが、遺された弟子たちは精力的な執筆活動を継続し、彼の教えをオスマン朝領に伝達した。第 3 節では、本研究の議論に関わる限りにおいて、フルーフィー教団の思想を整理して提示した。要約すれば、同教団の思想は、文字と数値に基づき、被造世界を 1 冊の書物として判読しようという試みである。

第4章では、ファドルッラーのメシア自称と弟子によるメシア認定を扱った。第1節では、ファドルッラーの原思想におけるマフディー論を確認した。まず、ファドルッラーがマフディーを自称していたテキスト上の根拠を自書『睡眠の書』の記述から特定した。そこでは、自身の見た夢に仮託する形で、メシアとしての自認が記録されていた。次に、彼がマフディーを自称した年代を特定した。特に、彼の直弟子にして後継者だったアリー・アル＝アーラーの叙事詩『承足台の書』の記述に着目し、教団内の伝統では、ファドルッラーのマフディーとしての顕現は788/1368-69年のことだとされていたことを明らかにした。次いで、ファドルッラーの提唱したメシア像を検討した。ファドルッラーはマフディーの身元をファーティマ裔とする説とイエスとする説の両方を採用しているが、彼の著作にはこの矛盾を解消する見解は記述されていない。本研究では、イエスとイマームに共通する「神の生きたコトバ」という点が強調されることで、マフディーのアイデンティティの二重性が統合されたという仮説を採用した。但し、彼の弟子たちは専らイエスをマフディーとする見解を採用している。従って、ファドルッラーとイエスを同一視する見解が着目される。第2節では、アリー・アル＝アーラーの『集合地の書』の読解に基づき、そこに描かれたファドルッラーのメシア認定の論理を検討した。アリー・アル＝アーラーはイエスがマフディーであるという前提の下、フルーフィー教団特有の数値計算方法を用いて、イエスとファドルッラーが同一存在であると論じた。第3節では、アナトリアでのフルーフィー思想普及に貢献したフィリシュテオール『恋慕の書』の読解に基づき、フィリシュテオールがファドルッラーをメシア的存在と位置づけていたことを明らかにした。フィリシュテオールは更に、アリー・アル＝アーラーと同様に、イエスがマフディーであるとの前提に立ち、ファドルッラーが夢を通じて真理を悟った年齢と再臨時のイエスの年齢という数的論拠に基づいて、ファドルッラーを第二のイエスと位置づけていた。

第5章では、ファドルッラーの直弟子であったサイイド・イスハークの『親愛の書』と『土の書』の読解に基づき、そこに描かれたファドルッラーの神格化

と終末論を考察した。第 1 節では、『親愛の書』に提示された直線的な時間モデルと循環的な時間モデルを検討し、それらに基づいてファドルッラーの神格化が図られていたことを明らかにした。前者では、人類史を「預言者位」・「聖者位」・「神性」の三段階に区分し、ファドルッラーを聖者位の封印者かつ神性の時代の開始者と見做した。ファドルッラーは、預言者が明かさなかった聖法の真意——すなわち神の命令が下された理由——を開示する聖者であり、神がその肉体に直接顕現する「神性顕現の場」だと論じられた。循環的な時間モデルでは、被造物の歴史が円環構造をなしているとの見解から、被造世界の歴史の開始点であるアダムと終端であるファドルッラーを同一視した。アダムは神の似姿で創造されたため、ファドルッラーはアダムの子孫として、神性顕現の場としてのステータスを継承する。第 2 節では、『土の書』の記述から、サイイド・イスハークの終末論を考察した。サイイド・イスハークは、クルアーンに描かれたモーセの見神の事例を模範に、終末には人類全体は自我を失い、神の姿で復活し、己の神性を自覚する。従って、本章では、人類共通の神性顕現の場というステータスの象徴としてファドルッラーが神格化されていたという見通しが得られた。

第 6 章では、ポスト・モンゴル期におけるメシア主義者の相互認識を扱った。具体的には、無名氏による『マフディーの書』の読解に基づき、フルーフィー教団の立場から試みられた、ムハンマド・ヌールバフシュ論駁の様相を明らかにした。第 1 節では、『マフディーの書』の写本に関する基礎情報を確認し、同書における論駁対象がヌールバフシュのメシア自称であったこと、同書がフルーフィー文献に共通する特徴を欠いていることを指摘した。第 2 節では、そうした特性にも拘わらず、『マフディーの書』に提示された教義がファドルッラーの教えと酷似していることを示し、更には、同書がファドルッラーに対する流言を論駁している点を踏まえて、無名氏の著者がフルーフィー教団と極めて近い立場にあったことを論じた。第 3 節では、同書に提示されたヌールバフシュのメシア自称論への具体的な論駁を検討した。ヌールバフシュは、クブラヴィー教団のシャイフの予言詩から導出したマフディー顕現の年代と自身がマフディ

ーを称した期日の一致、ハディースに伝えられたマフディーの特徴と自身のそれとの一致を、自身のマフディー性の論拠としていた。これに対し、『マフディーの書』は、同一の予言詩から導かれる数値の再計算とハディースの再解釈に基づき、ヌールバフシュがマフディーであることを否定した。テキストはファドルッラーがマフディーであると明示的に説明していないにも拘わらず、代替案として提示されたマフディー顕現の年代とマフディーの特徴は、ファドルッラーのそれと一致していた。これらの特徴を踏まえて、『マフディーの書』は、非フルフィー文献を装いながら、ファドルッラーのメシア性を受け入れるように読者を誘導する布教用パンフレットであると結論付けた。